

茨城大学学報

第310号

平成25年8月～平成25年9月



広域水圏環境科学教育研究センター（茨城県潮来市）

INDEX

- ◆ 広域水圏センターが湖沼関係で、全国初の教育関係共同利用拠点に認定
- ◆ 「第53回水戸黄門まつり」に8年連続で参加
- ◆ インドネシア共和国で農学部共通科目「国際インターンシップ」を開講
- ◆ 「ものづくり体験・理科工作教室」を開催
- ◆ 太田寛行農学部教授が平成24年度特別研究員等審査会専門委員（書面担当）表彰を受賞
- ◆ 理学部FD講演会を開催
- ◆ インドネシア共和国を訪問して連携大学とのサマーコースを実施
- ◆ 人文学部がJICA筑波と連携協力推進にかかる覚書を締結
- ◆ 平成25年度茨城大学学位記授与式を挙

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

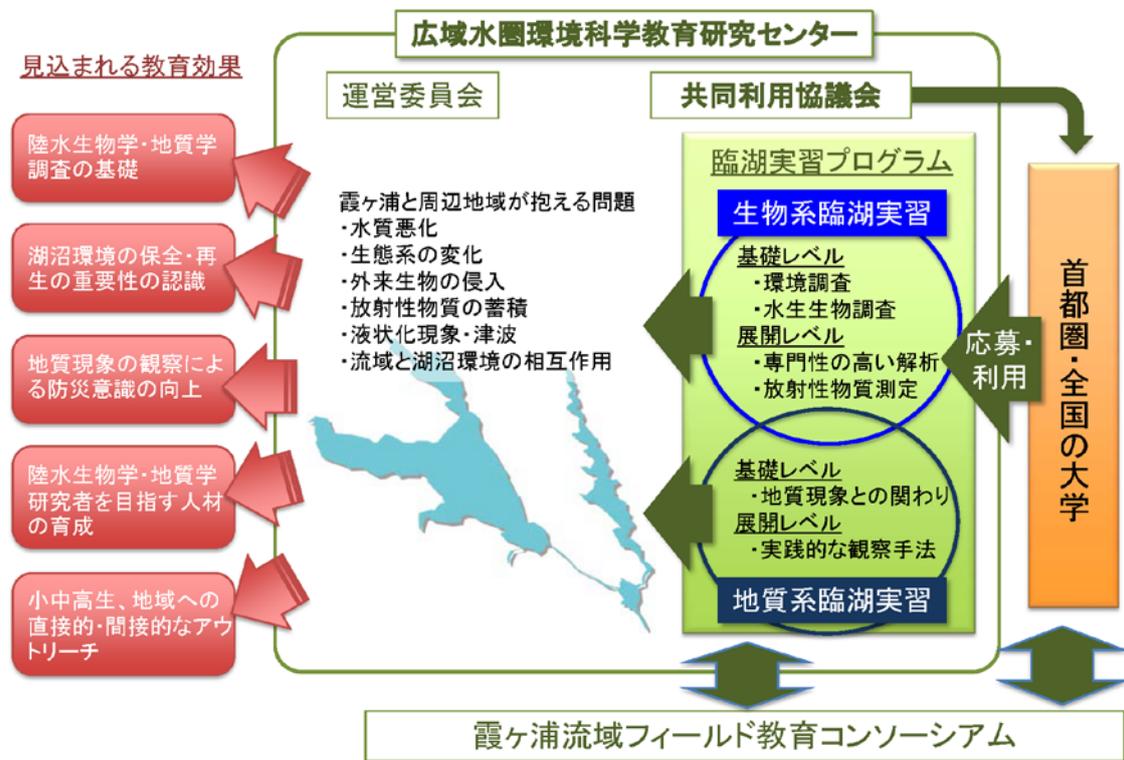
FAX 029-228-8019

◆ 広域水圏センターが湖沼関係で、全国初の教育関係共同利用拠点に認定

広域水圏環境科学教育研究センターが、平成 25 年 8 月 2 日（金）に「教育関係共同利用拠点」に認定されました。「教育関係共同利用拠点」とは、各大学のセンターや練習船、農場などを全国の大学で共同利用するために文部科学大臣が認定するものです。臨海・臨湖実験所の関係では、これまで東北大（浅虫海洋生物学教育研究センター）や京大（瀬戸臨海実験所）など 6 大学が認定されていましたが、湖沼関係では茨城大学広域水圏環境科学教育研究センターが全国初の認定となりました。

今回認定された拠点名は「霞ヶ浦流域の水圏環境科学フィールド教育拠点」です。霞ヶ浦という絶好のフィールドを生かし全国から学生を受け入れて、外来生物問題などの湖沼生物環境と津波防災などの地質環境、さらに持続可能な利用等に関する各種実習を提供します。また、大学院生などの研究も支援します。これまで拠点申請に向けて広く呼びかけた結果、平成 25 年度の実習参加者は 17 大学と 1 つの高専から延べ 400 人に達し、来年度以降さらに増える見通しです。今後、他大学や地域関係者による共同利用協議会を設置して、参加者の意見を聞きながら全国に開かれた運営体制を整えます。

霞ヶ浦の流域環境に関する教育研究は本学が長い実績を持つ分野であり、広域水圏環境科学教育研究センターでは、これを全国の学生や地域の方々の教育に活用できるように、今後一層努力したいと考えています。



「霞ヶ浦流域の水圏環境科学フィールド教育拠点」の概要（茨城大学）

◆ 「第53回水戸黄門まつり」に8年連続で参加

本学は、平成25年8月3日（土）に水戸市で開催された「第53回水戸黄門まつり・市民カーニバル in MITO」に、毎年「夏の思い出に みんなで踊ろう」のキャッチフレーズの下、8年連続で参加しました。

参加チームは、全46チーム（約4,000人）で、本学からは、前田克彦事務局長を先頭に相原重昭総務部長、大久保政博学術企画部長、山内浩一企画課長、金田富雄学生生活課長及び佐藤正志労務課長を含め50名以上の教職員と留学生を含む40名以上の学生が参加し、総勢約100名の学生・教職員が、水戸中央郵便局前から大工町の1.5kmを午後4時30分から4時間、踊り通しました。



市民カーニバルに参加する前田克彦事務局長（左）、佐藤正志労務課長（中央）、相原重昭総務部長（右）

また、六角堂復興担当の三輪五十二特命教授も、再建の報告とご支援をいただいたお礼を兼ねて、昨年に引き続き参加された他、今年度公開予定の映画「天心」の関係者にも応援していただき、積極的にアピールを行いました。

茨城大学勤務時代から連続参加の吉田平元学務部長、草薨公元企画課長（現 東京学芸大学総務課長）、元人文学部教授のジョイス・イサベル・カニンガム名誉教授の他、沿道で応援していた本学職員も飛び入りで参加し、一緒に市民カーニバルを盛り上げました。

今年は、スタート直後に急な大雨が降り、中止が心配されましたが、30分程で小雨となり、再開された後は最後まで楽しく踊り通しました。残念ながら順位は11位で、今年も参加賞にとどまったが、参加者全員笑顔で帰途につきました。

黄門まつり終了後に大学で開催した懇親会では、初参加の職員・学生から「参加して本当に楽しかった。思い出になりました。」「来年もぜひ参加したい。」などの感想が述べられました。



教職員・学生全員での記念撮影

◆ インドネシア共和国で農学部共通科目「国際インターンシップ」を開講

農学部では平成 25 年 8 月 17 日（土）から 28 日（水）まで、インドネシア共和国のガジャ・マダ大学及び中部ジャワ州プルバリング郡セラン村において農学部共通科目「国際インターンシップ」を開講しました。

平成 24 年に経済団体連合会が会員企業に対して実施したアンケート調査によると、新卒採用の選考にあたって特に重視した上位 5 点はコミュニケーション能力、主体性、チャレンジ精神、協調性及び誠実性。この授業では海外で課題解決型学習を行うことにより、グローバル人材の育成や高度な専門知識の習得のみならず、このような能力について自己啓発の契機とすることを目指しました。

農学部では、この授業をガジャ・マダ大学との協同で実施しました。ガジャ・マダ大学は、40 年以上にわたり社会奉仕活動を通じた実践教育（インドネシア語の頭文字を取って KKN と呼ぶ）を 3 単位の必修科目として全学学生に課しています。KKN では学生は農村に 2 ヶ月滞在します。活動内容の決定、資金集めからスタートし、全ての活動を学生グループが自主的に行わなければいけません。

今回の「国際インターンシップ」は、ジャワ州プルバリング郡セラン村のイチゴ産地支援活動に参加し、本学農学部の学生 5 名はガジャ・マダ大学の学生 25 名と同様に 4 グループに分かれ、小学校での歯磨き教室、看板作り、清掃活動、植樹など様々な活動に取り組みました。指導した農学部の佐藤達雄准教授は「地域を挙げての住民の暖かい歓迎もあり、期待以上の成果を上げることができた。」と感想を述べました。



植樹作業後の帰り道にて



現地の小学生と交流する茨城大農学部の学生たち

◆ 「ものづくり体験・理科工作教室」を開催

工学部では、日本機械学会関東支部茨城ブロック共催、日立市教育委員会後援の下に、平成 25 年 8 月 23 日（金）に地域連携推進の一環として、「ものづくり体験・理科工作教室」を開催しました。今年で 8 回目を数えるこの教室は、小学生の高学年 37 名と保護者が参加しました。ものづくり体験として、「電子ピアノ」、「立体万華鏡と PP バンドサッカーボール」および「手作り燃料電池と色が変わる不思議な液体」の 3 テーマを用意しました。

開会式で、米倉達広工学部長と武田誠総括技術長から、3 テーマの製作を通して、ものづくりを楽しく体験してもらうように、今回の教室の趣旨説明がありました。

続いて、工学部技術部職員の案内で、参加者はテーマ毎の会場に分かれました。「電子ピアノ」教室では、初めて行うハンダ付けに緊張しながらもスタッフの手助けを受け、無事基盤を完成させました。「立体万華鏡と PP バンドサッカーボール」教室では、設計図から工作工具を使用して立体像が見える万華鏡と PP バンドを用いたサッカーボールを作りました。「手作り燃料電池と色が変わる不思議な液体」教室では、鉛筆の芯を電極にした燃料電池の工作と 2 種類の薬品を混ぜると色が変わる不思議な液体を用いた化学実験や、液体窒素を用いた超低温の世界を体験しました。

参加した小学生は、完成した作品を前に満足そうな笑顔を浮かべました。今回の教室では、ものづくり体験が出来た有意義な 3 時間となり、帰り際には「来年も参加したい。」という声が聞かれました。



PP バンドサッカーボール教室の工作風景



「ものづくり体験・理科工作教室」参加者

◆ 太田寛行農学部教授が平成 24 年度特別研究員等 審査会専門委員（書面担当）表彰を受賞

農学部の太田寛行教授が、独立行政法人日本学術振興会（以下、JSPS。）より平成 24 年度特別研究員等審査会専門委員（書面担当）表彰を受賞し、平成 25 年 8 月 27 日（火）に表彰式を開催しました。

表彰式では、池田幸雄学長から太田教授に記念の盾が贈呈され、本件の奮励に対するお祝いの言葉の後、懇談が行われました。

JSPS では、学術研究の将来を担う研究者の養成・確保を目的とした特別研究員事業を行っており、その選考に際しては、適正・公平な審査に努めています。

審査は、専門的見地から 3 段階で行われ、第 1 段の書面審査は、全ての審査の基盤となるものであり、その質を高めていくことが大変重要であるとのこと。

そのため、JSPS では、審査終了後、書面審査結果の公平性・公正性についての検証を実施しており、有意義な審査意見を付した専門委員を表彰することとしています。

今回の表彰は、書面審査を行った約 1,300 名の専門委員の中から 46 名が選考され、本学では、太田教授が初の受賞となりました。



左から、神永理事・副学長、太田教授、池田学長



懇談の様子

◆ 理学部 FD 講演会を開催

理学部では、平成 25 年 9 月 12 日（木）、理学部 K 棟のインタビュースタジオにおいて、**■真一** 茨城県副知事を講師にお招きして「元気ないばらきづくりと茨城大学への期待」と題して、理学部 FD 講演会を開催しました。この講演会は、外部評価の受審を今年度予定している理学部の FD 活動の一環として開催されました。理学部のみならず、全学の教職員、学生を含めて 120 名を超える参加者が集まりました。

講演では、茨城県が置かれている客観的な状況と将来予測から始まり、現在、展開している取組み、さらに今後の計画（いきいき いばらき 生活大県プラン）についてわかりやすく詳細な説明がありました。そのような中で、茨城大学に具体的に何が期待されているかを、教育、研究、人材育成、県北地域の振興、地域連携等に分けて、明確に説明をしていただきました。茨城県にある茨城大学として、強みを活かしながらその役割を着実に遂行することの重要性を、改めて深く理解することができた時間となりました。

参加者からは、「副知事の講演はエネルギーかつとてもパワフルなもので、県政にかける熱い想いがよく伝わった。あらゆる産業・科学技術がバランスよく発展している茨城県を再認識するとともに、茨城大学に求められている社会的役割がよくわかった。」との声が数多く聞かれ、有意義かつ貴重な講演会となりました。



講演を行う ■真一 茨城県副知事



熱心に講演を聞く参加者

■ = 「木」へんに「神」

◆ インドネシア共和国を訪問して連携大学とのサマーコースを実施

大学院農学研究科では、副専攻プログラム『地域サステナビリティの実践農学教育』を通して、インドネシア共和国との国際共同教育を推進しています。その一環であるサマーコースの実施にともない、同国ボゴール農科大学（ジャワ西部）およびウダヤナ大学（バリ）に平成25年9月14日（土）から21日（土）まで学生、教職員を派遣しました。このサマーコースには、本学の大学院生・学部生合計9名のほか、筑波大学、琉球大学、東京農工大学、日本大学の学生も現地で合流し、総勢19名の日本人学生が参加しました。留学生を含めて計5ヶ国の学生が参加することとなり、「インター・ナショナル」であり「インター・ユニバーシティ」となる教育プログラムが展開されました。

ボゴール農科大学では、現地学生24名を加えて混成グループを作り、大学演習林や大学圃場において、環境調査などの現地実習を実施しました。実習で得たデータや知識を基に、グループごとに「持続可能な農業」の実現に向けた課題と解決策を話し合い、その結果を報告会で相互に議論しました。ウダヤナ大学でも同様に、8名の現地学生とともにバリに固有の農業水理組合「スバック」や、ユネスコ世界遺産に登録された棚田などでの実習を行いました。学生が主体となって現地の方から経営手法や栽培方法などを聞き取ったほか、それぞれの調査地で簡易土壌分析を行い、観光産業が優勢なバリにおける農業のあり方について考察し、同様に報告会を行いました。

日本人学生は、当初、流暢に話せないことを恥じて積極的に発言しない場合が多く見受けられましたが、議論が進むにつれて意見を言い合える関係が築かれていきました。インドネシアの学生の友好的な姿勢にも助けられ、日本人学生も自然と積極的に発言する「外向き指向」を育む場となりました。

現地では、「農業の持続可能性」を考察するだけでなく、それぞれの修士論文研究に関するポスターセッションなども行いました。大学での教育・研究環境が大きく異なるインドネシア人学生との研究交流は、現地学生のもつ高い向上心に刺激されたり、また、日本での恵まれた研究環境を認識する契機となったりと、双方にとって非常に有意義なものとなりました。



インドネシア共和国・バリ島の有機農家で



ボゴール農科大学演習林にて



ウダヤナ大学での閉会式



ボゴール農科大学ゲストハウスでの議論

◆ 人文学部が JICA 筑波と連携協力推進にかかる覚書を締結

人文学部と独立行政法人国際協力機構筑波国際センター（JICA 筑波）は、開発途上国及び開発途上地域への国際協力事業の質の向上、国際社会・地域社会に貢献する人材の育成等を目的として、相互の協力可能な分野において連携協力を推進するため、平成 25 年 9 月 19 日（木）、茨城大学人文学部にて覚書協定を締結しました。

これに基づき、平成25年度後期10月より「国際協力論」の授業は、JICA筑波及びJICA本部から木邨洗一所長をはじめ国際協力の現場で活動されてこられた講師陣が担当することとなり、人文学部の教育力が一段とレベルアップします。

この協定により人文学部における国際協力関係の授業は、現場の状況を踏まえた、より充実したものとなり、学生が途上国の開発問題とその要因について認識を深めることが期待できます。また、学生は、国際協力の仕組みと実際の取り組み、国際協力をめぐる最近の動きについて具体的知識を得ることができます。さらに、学生が国際社会の問題について関心を持ち、途上国の開発や国際協力のあり方について積極的に考え、意見を言えるような教育に深める授業を「国際協力論」講座は目指しています。

今後、人文学部では「国際協力論」の授業にとどまらず連携を拡大してゆき、さらにインターンシップ実施等を通じて、学生教育にとって有意義な協定としてJICA筑波との連携協力を推進させる計画です。



協定書を手を持つ 伏見厚次郎 人文学部長(左)、木邨洗一 JICA 筑波 所長 (右)

◆ 平成 25 年度茨城大学学位記授与式を挙行

平成 25 年 9 月 26 日（木）、茨城大学茨苑会館 第 7・8 集会室において平成 25 年度茨城大学学位記授与式を挙行し、課程博士 7 名、課程修士 4 名、課程学士 16 名の計 27 名に学位記が授与されました。

列席者が見守る中、修了・卒業生に対して、池田幸雄学長から学位記が授与され、「専門分野にのみこだわらず、興味のあることを広く勉強し、生涯学習を心がけて活躍されることを祈念している」との告辞が述べられました。

また、学位記授与式終了後、理工学研究科博士後期課程修了生と、池田学長はじめ神永理事・副学長(学術担当)、米倉理工学研究科長、折山副研究科長との懇談会が開催され、池田学長からは各々激励の言葉が述べられ、門出を祝いました。



学位記を授与する池田学長



懇談会終了後の記念撮影